
壊れた時計

妹明

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

壊れた時計

【Nコード】

N2354P

【作者名】

妹明

【あらすじ】

動き出すまであたしは時計を持ち続ける。

あたしの時計を止めたのは、誰？
それを動かそうとしている君は、どんな顔をしてるの？

「またそんな顔してる」

「あたしは分かんないよ。どんな顔してるって」

「つまんなそうな顔」

「ふーん」

顔の横にある半分枯れかけた草の匂いを嗅ぎながら、多分今空を見上げてる。

「今日はよく晴れてる」

「じゃ、いい天気だ」

「ん」

奴はいつもあたしの隣で座ってる。多分ね。でも、隣にいつもいるのは事実。

あたしの世界は黒と光の二色。今自分がいる世界が汚いのか綺麗なのかすら分かんない。

それでも、あんまり気に病んではいけない。はず。

「また時計開けてるよ」

「ん？」

「その時計、いつになったら捨てるの？」

「今はまだ早いよ。もうちょっとだけ、落ち着くまで」

「その時計のように、お前の時間も止まったままって？」

「さあ」

この時計はもう再び歩む事はない。あたしも、この時計が歩くことをやめたその日から、歩くことをやめた。ずっと、同じ日を繰り返

すよつに、その日に蹲り続けよつとしてる。

「動かなきゃ、時計の意味はないよ」

「あるだけで、意味がある物はこの世に沢山あるんだよ」

「お前にとって、それがこの時計？」

「うん」

「そか」

「いつか捨てるなんて、無理そうだね」

「…」

体を起して、時計を持つてる手元の方に顔を向ける。開けたり、閉めたり。それをずっと繰り返した。

「そうでもないんじゃない？」

そうであつて欲しい。そんな願いを込めて、あたしはそう呟いておいた。

「そか」

(後書き)

あたしが時計を捨てた日。

それは、きっと。。。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2354p/>

壊れた時計

2010年12月1日10時52分発行